ー文化の薫る活力ある地域づくりをめざしてー　財団では、このような事業を行っています。

普及啓発事業

1. 財団ニュース「作州路」14 号の発行

2. 普及講座の開催
陶芸入門講座（8 回講座）
期　日／平成 22 年 5 月～12 月
会　場／勝央町公民館・工芸室
参加者／ 28 名

「絵画教室」の様子

絵画教室（前期 6 回・後期 6 回）
期　日／平成 22 年 4 月
～平成 23 年 3 月
会　場／勝央町公民館・工芸室
参加者／前期 22 名・後期 19 名

夏休みこども体験講座　オリジナルランプをつくろう！
期　日／平成22 年 8 月 7 日
会　場／勝央町役場・大会議室　参加者／ 40 名

3．事業協賛に伴うＰＲ活動　金時祭花火大会への協賛

芸術文化活動事業

1. 展覧会の実施
【主催事業】
■絵画展の開催
公募展
「第 7 回ミマサカコドモ絵画展」
会　期／平成 23 年 1 月 6 日
～ 2 月 6 日
会　場／勝央美術文学館・展示室
町民ギャラリー 1・2

「第 7 回ミマサカコドモ絵画展」会場風景

「画家たちが描いたクレパス画名品展」開会式の様子

クレパス誕生 85 周年記念
画家たちが描いたクレパス画名品展
ならびに
こどもたちが描いたクレパス画力作展
会　期／平成 22 年 9 月 4 日
～ 10 月 11 日
会　場／勝央美術文学館・全館

«関連講座»
クレパス画教室（2 回）
クレパスで描くポストカード教室（1 回）

「大原綾香 古山敬典 山本希実作品展」
会　期／
平成 23 年
2 月 12 日
～ 3 月 13 日
会　場／
勝央美術文学館
町民ギャラリー 1

「大原綾香 古山敬典 山本希実作品展」会場風景

[共催事業]
■企画展の実施
«文学»
小企画 24「綺堂奇談」
小企画 25「勝央文学散歩」
小企画 26「木村毅とスポーツ」
«美術»
「しょうおう発掘成果展」
「郷土の画家ｼﾘｰｽﾞ ー素描と淡彩Ⅶー」
「ポスター展 3」
「前期絵画教室の作品展」
こどもとおやのための企画Ⅴ「貝と化石の物語展」
「T 氏の小さなコレクション」
「絵本作家　本田哲也の世界」
没後 10 年「林三従の仕事展」
「後期絵画教室の作品展」
「郷土の画家ｼﾘｰｽﾞ ー春をうたうー」
「第 7 回陶芸教室の作品展」

【助成事業】
勝央金時太鼓保存会活動
勝央町文化協会活動事業
勝央絵画教室
GANNA コンサート

【後援事業】
第 6 回しょうおう町民音楽祭
横仙歌舞伎四季の公演＜冬＞

その他の事業

1．文化財資料収集保存事業
2．学術的研究及び図書の発刊事業等の事業を継続しておこなっております。

地域の文化活動を応援します。

当財団は、皆様のご寄付により地域芸術文化振興のための活動を実施いたします。皆様の一層のお志をお待ちしております。

木村増夫 著『坂田公時伝』と『足柄山のきんたろう』

＜坂田公時（金時）＞は、幼名を＜金太郎＞と言い、現在の静岡県小山町の足柄山で山姥の子として生を受ける。幼い金太郎の活躍は、昔話として全国各地で語り継がれているが、勝央町岡の故 木村増夫氏は、郷土史家として地元に伝わる＜金時＞伝承をまとめた文章を数多く残している。

木村益夫著『坂田公時伝』と『足柄山のきんたろう』の写し

編集後記

昨年 11 月、青蛙房元店主　岡本経一さんが、101 歳で亡くなられました。岡本さんは、勝央町勝間田出身。十代で上京し同郷の先輩 額田六福氏の推薦により岡本綺堂の書生となり後に養嗣子となりました。綺堂の著作はもとより落語や江戸の研究書など良書を数多く出版。その功績が認められ菊池寛賞や長谷川伸賞などを受賞されました。心よりお悔やみ申し上げます。（E.N）

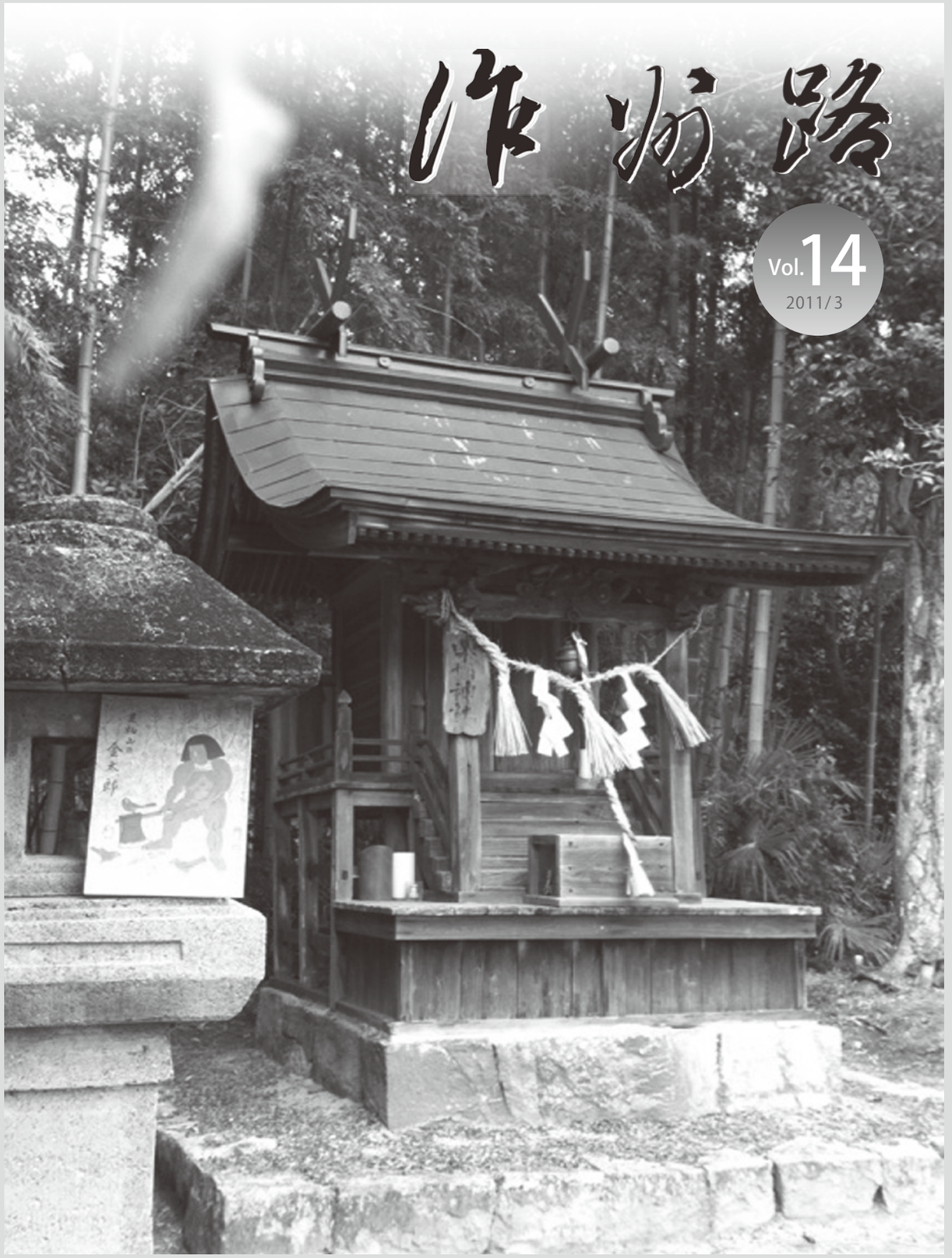
財団法人　美作学術文化振興財団
〒709-4316 岡山県勝田郡勝央町勝間田207-4　Tel. 0868-38-0270 ／ Fax. 0868-38-0260

発行日：2011 年 3 月 31 日
編集・発行：財美作学術文化振興財団
印刷：津山朝日新聞社　印刷部

財団法人 美作学術文化振興財団

作州路

Vol.14
2011/3



勝央町 平地区には＜坂田金時（幼名：金太郎）＞の伝承があり、「寛弘七年十二月十五日、九州征伐へ行く途中、この地で熱病にかかり看病の甲斐なく亡くなった」とされ、遺骸を奉る祠＜栗柄神社＞があります。今年は、金時が亡くなってから丁度千年目にあたります。

出雲街道宿場考

郷土の二人の勇士、その愛と死

耕風　土　井　浩　史（美作阿部知二を知る会）

◇はじめに◇

学校で習う日本史や世界史は、ほとんどの場合、国家の政治・経済が中心であり、その事象は、しばしば権力闘争であったり、戦争や革命であったりする。学生時代、私はそれらの歴史が、自分とは関係のない場所や時代の人間ドラマくらいにしか思っていなかった。ところが最近、郷土の二人の勇士の墓に詣でる機会があって、私は初めて歴史の大河が、身近な所を流れており、郷土の人々の愛と歴史の重みを強く感じるようになった。そこで小詩を交えて、二つの史話を紹介したい。

(1) 軍艦「大和」で特攻出撃した郷土の兵士

いま『Space Battleship ヤマト』という映画が話題である。これは人気アニメ『宇宙戦艦ヤマト』がベースになっていて、有名歌手が出演しているためか評判がよい。

アニメの『宇宙戦艦ヤマト』は、歴史的な軍艦「大和」の実話から誕生したＳＦロマンである。即ち昭和 20 年4月6日、桜の中を特攻出撃し、翌 7 日約 300 機のアメリカ軍戦闘機と激闘の末、九州鹿児島「坊の岬」沖で沈没した巨大軍艦「大和」が、生まれ変わり、リメイクされて甦ったのが「宇宙戦艦ヤマト」というわけである。ところで「軍艦」は、戦闘艦全体の呼称であり、その中の巨大軍艦を「戦艦」ということから「大和」は両方呼ばれるが、どちらかと言えば「戦艦」の方が多い。当時 3332 人の「大和」乗組員の１割足らずが、奇跡的に生還したと言われる。

さてここで紹介する我が村の出身兵士・福嶋眞一氏の名前を見つけたのは、数年前に映画化されたドキュメンタリー小説『男たちの大和』（辺見じゅん著）の巻末「戦艦大和乗組員戦没者名簿」においてである。あの有名な「戦艦大和」の激戦の勇士が、わが村の出身者であったとは、戦後 60 年間村人たちはほとんど私に語ることがなかった。いま村はずれの山中に墓標が、ひっそりと建っている。

「故海軍一等兵曹・福嶋眞一。昭和 20 年４月７日軍艦大和ニ於イテ戦死ス。長男 27 歳」

嗚呼！「大和ヨリヨモツヒラサカ桜チル」（川崎展宏の俳句を翻案した）ような最期であったろうか。遺骨と遺霊は、いまだに東シナ海の海底に眠ったままである。いや魂だけは、故郷の親元に帰ってきたのであろうか。

昭和 19 年、南太平洋のテニアン島で日本軍が全滅したとき、私の又従兄・有元盛男氏は戦死したものと、両親や村人たちは思った。 翌昭和 20 年春、桜の蕾が膨らむころ、福嶋眞一氏は、有元家を訪れ「盛ちゃんの仇を討って来る」と言い残して出撃していったという。やがて終戦となり、昭和 21 年春、九死に一生を得て有元氏が帰郷したとき、両親や村人たちは「幽霊に脚が生えて帰ってきた」と言って驚喜したそうである。

福嶋眞一氏の墓

いま有元氏は、故郷の人々を守ろうとして命を奉げた福嶋眞一氏を思い出すとき、戦争の不条理と福嶋氏の「愛と死」をしみじみ感じると私に語る。私は弔句を作って故人に奉げようと思った。

＊命火の燃えて散りゆく桜花　　合掌

(2) 元禄一揆の作州義民
堀内三郎右衛門の「愛と死」

さて、もう一つ。昔、祖父からこんな話を聞いた。幕末（慶応 2 年）に起きた「改正一揆」か、明治 6 年に起きた「血税一揆」か分からないが、貧窮に耐えられず決起した農民たちが裁きを受け、私の先祖ら一揆の参加者たちが尻叩きの罰に処せられたらしい。歩けないので津山から家まで這って帰ったという。いつの時代も「苛政は虎よりも猛なり」（礼記）である。物を生産しない少数の支配階級が、武力や権力をもって、物を生産する人民を抑圧し、搾取するのは、最大不幸の非道な政治体制である。水飲み百姓の末裔たる私は、農民一揆の悲壮な憤りがよく分かる。

こんな話を突然思い出したのは、津山市高倉に住む吟友から元禄一揆の歴史を聞いたからである。現在津山市高野の満福寺に義民・堀内三郎右衛門一族のお墓があり、昭和７年遺族によって傍らに顕彰碑が建てられた。時の法学博士・平沼淑郎氏による碑文には、一揆の様子が簡潔に述べられている。

「当時ノ租法（年貢率の意＝筆者注釈。以下同様）、幕邑ハ十五（５公５民）、侯国ハ十六（６公４民）。而シテ高倉村ハ森氏ニ属シ、民ハ常ニ重税ニ苦シメラル。元禄10年森氏、国除カレ（藩主・森長成病死のため）、州ヲ挙ゲテ幕邑（幕府直轄領）トナル。」

こうして年貢率が少し軽くなったので、農民が喜んだのも束の間、元禄 11 年正月、松平長距が新藩主となって、年貢率を森藩と同じ ６ 公 ４ 民以上にもどしたため、農民たちは貧苦に耐えられず、強訴した。この時、高倉村の大庄屋・堀内三郎右衛門らが「強キヲ抑エ弱キヲ助ケタ」ため処刑されたことから「高倉騒動」と言われ、後「元禄一揆」と呼ばれるようになった。

文献によると、一揆の様相は、大体次のようなものであった。

元禄 11 年 11 月７日、千人余の農民たちは、蓑笠姿に蓆旗や鳶口を持って、津山城下吉井河原に集まり、各地区の大庄屋宅や郡代宅などへ押し掛け、年貢の減免を訴えた。最初大庄屋たち（21 名）は、どう対応すべきか協議したが、郡代に説得され、権力に屈して、農民たちを弾圧する側にまわった。その中で堀内三郎右衛門らは、農民たちの困窮を救うため、身命を賭して彼らの味方になり、強訴の先頭に立ったと言われる。

一揆は数日間に及び、群衆が騒いだため、藩は一旦訴状を受け取り、減免を検討する約束をしたが、百姓退散後、約束を破り、堀内三郎右衛門をはじめ弟・倅ら一揆の先頭に立った人物８人を捕縛し、翌年 ３ 月斬罪に処した。処刑後、遺骸は兼田河原（現在刑場跡に供養塔がある）に放置されていたのを、高野本郷「満福寺」の僧　玄法院日因上人が憐れみ、収骨して堀内氏らを寺中に葬った。

時代は下って、昭和 47 年 ３ 月、津山市高倉の村民たちは、長年の懸案であった「義民堀内君顕彰碑」を地区内に建てた。

碑文（治郎丸憲三氏撰）に曰く、

満福寺と顕彰碑（墓は左奥にある）

「郷土ノ艱難ニ身命ヲ挺シ、従容トシテ義ニ就クモノ蓋シ稀ナリ。嗚呼堀内氏ノ壮挙タルヤ元禄一揆ノ精華、作州義人ノ先蹤ナリ。悠久 300 年、今ニ及ブマデ芳烈ヲ伝エ、光芒ヲ放テリ」と。

そこで、私も一詩献上してこの稿の御礼にかえたい。

頌作州義人　耕風

苛政那堪隴畝民
群萌憤起訴赤貧
大司枉殺無情極
為自赴難死節人

（訓読）作州の義人を頌ふ
苛政那ぞ耐へん隴畝の民
群萌憤起して赤貧を訴ふ
大司枉殺す無情の極み
為に自ら難に赴く死節の人

以上、二人の行動に共通するものは、郷土の人々に対する強い愛と信念である。同じ立場に身を置くとき、果たして私は同様の節義を守れるだろうかと自己反省しきりである。せめて故郷の歴史をしっかり学び、顕彰し、後生に伝えていくことが、私たちの責務だと思う。

末尾になりましたが拙稿のため関係者の皆様にご協力をいただきましたこと厚く御礼申し上げます。

〈参考文献〉

・『戦艦大和ノ最期』講談社文庫／吉田満 著
・『男たちの大和』ハルキ文庫／辺見じゅん 著
・『宇宙戦艦ヤマト』ＭＦ文庫／藤川桂介 作
　／ひおあきら 画
　（ 監督・総設定デザイン：松本零士
　／企画・原案：西崎義展 ）
・『元禄一揆（絵）ものがたり』
　／美作の歴史を知る会（代表・長畑博）